資料

児童期における公正観の発達と権威概念の 発達との関係について

渡 辺 弥 生*

RELATIONSHIP OF DEVELOPMENT BETWEEN DISTRIBUTIVE JUSTICE AND AUTHORITY IN CHILDHOOD

Yayoi WATANABE

The purpose of this study was to assess whether children's conceptions regarding authority vary as a function of the development of distributive justice. 484 children from 1 to 6 graders were administered 4 interviews to examine this relationship. Their interviews consisted of 4 story-dilemmas (about adult authority, peer authority, and distributive justice). Their responses were analyzed in detail by issue scoring method which classified into one of 6 levels. The results showed that children's authority levels were closely associated with age, and their justice levels. It was suggested that children's developmental status on the sequence of justice levels approximately lead their progress on the authority levels.

Key words: adult authority, peer authority, justice, children, development

問 題

「公正さ」は、子どもが関わる対人関係を維持し、発展させていく過程のために重要な概念である。生まれてはじめてもつ関係は、親子関係であり、そこでは、一方的に子どもが親に依存し、親からの命令や言いつけを聞くことにより、対人関係が維持されている。それが、やがて親だけではなく、仲間へと対人関係の範囲が広がり、別の人間の存在を理解するようになる。また、その理解の過程において、自己と他者との欲求と欲求とがぶつかりあう葛藤状態を幾度となく経験し、問題解決の能力やスキルを学習していくわけである。したがって、こうしたプロセスにおいて、「何が対人関係を維持する上で公正であるか」「公正な解決方法とは何か」といったことを理解し、適切な判断をする能力が必要である。渡辺(1986)によって実証された公正さの発達段階では、例えば、0—B段階の子は、外見的特徴により、分配を規

定し、「大きい人にたくさんあげる」などのような、物理的な影響力をもつものを重視する。また、1—A段階では、親などの権威のあるものの言うことに従うといった理由が典型的に聞かれる。すなわち、おとなや仲間に対する「権威」といったものへの子どもの反応のしかたが、公正さの解決にも大きく関与していることが明らかである。また、「公正」及び「権威」という概念は道徳性、社会性の発達を捉えていく上でも重要な概念であると考えられる。

「権威」については、社会的発達に及ぼす子育ての影響という観点から、心理学では検討されてきている。研究の大半が、子どもの社会的行動を統制するために、親や教師が用いるしつけの效果に焦点をあてている。しかし、子どものもつ「権威」の概念それ自体にはほとんど注意が向けられていない。Rawls (1971) は、子どもは権威者から与えられた命令が妥当なものか否かについて考えないし、命令が与えられることについての知識や理解に欠け、疑いもなく従うものだと考えている。また、Piaget (1932) は、幼い子は自己中心的であるが、年齢、

* 筑波大学 (University of Tsukuba)

体格、力といったものが自分達より大きいことを背景にした権威者である「おとな」の制約を受けながら成長しており、道徳的な規則については、多かれ少なかれ従うが、これは良心によるものではなく外的に与えられたものに従っていると考えている。Kohlberg (1969) は、道徳性の発達段階の第1段階を罰と服従の段階としており、行動の物理的結果の如何が行為の善悪を決定する段階であるとしている。罰を回避し、盲目的に権威に服従することが、この段階の特徴である。Rawls は、「権威」の概念と年齢との関係については言及していないが、Piaget によれば、この罰と服従の段階は8歳から9歳までの子どもに、Kohlberg によれば、10歳から12歳までの子どもに該当すると考えられている。また、Youniss (1976) は、6歳から13歳の子どものほとんどはすべて従うことにより、子どもとおとなとの関係を維持しているとし、年齢とともに、相手の命令を受身に聞いていたのが、自発的に従うようになると報告している。

従来の考え方は、権威に対する絶対的、盲目的な服従心が、生後まもない頃から強く見られるのが、年齢とともにしだいにその傾向が弱まっていくという見方が強かったように思われる。すなわち、おとなと子どもとの従属関係に焦点があてられすぎており、子どもの初期の道徳理解はすべておとなの命令によって形成されるもので

TABLE 1 公正観の発達段階

段階	概 要
0—A	行動を起こしたいという欲求から選択。理由は正当化しようという意図はなく、ただ欲求を主張することのみ（例：それを使いたいから得たい。）
0—B	依然、欲求中心だが、外見の特徴や性等に基づいて理由づけするようになる（例：女の子だからいちばんたくさん欲しい）。目的は変わりやすく、自分に有利にする傾向がある。
1—A	厳密な平等性の概念からなる（例：みんな同じだけもらうべき）。平等はケンカや葛藤を避けるものとして考えられる。一方的で柔軟性に欠ける。
1—B	行動の互惠の概念からなる。人は善・悪に関してお返しを受けるべきだと考える。メリットや功績の概念が現れるが、まだ一方的で柔軟性に欠ける。
2—A	さまざまな人が存在しているが、人間の価値は等しいということが理解されている。ただ、選択理由は主張（競争）を避け、量的に妥協しようとする（例：彼がいちばん多く、彼女は少し）。
2—B	互惠、平等、公平の真の意味を考える。さまざまな人の主張や状況の特殊性を理解する。したがって、場面により判断理由は変わる。基本的にはだれもが当然、分け前をもらうべきだという考え方。

あると述べられてきた。言い換えれば、子どもの価値は自分自身により構造化されていくものではなく、おとなから与えられるものと考えられており、権威への従順が年齢とともに減少していることが発達であると考えられていた傾向が強い。しかし、これは、あまりにもおとな中心の考え方である。道徳性の発達が権威の発達であるかのような見方が強く、「権威」以外の道徳概念の発達がほとんど検討されていなかった他、子どもとおとなとの従属関係が強調され、仲間との従属関係について区別して言及されていなかったことが指摘される。

むしろ、もっと子どもを中心に据えた観点から捉えられるべきであろう。Damon (1977) は、「権威」の概念はもともと「公正さ」の概念の源にあるものではないかと考え、子ども自身が対人関係を維持していくために必要な「公正さ」の概念を理解する過程において、おとなの命令に従うことが年少の頃には必要なことであり、それ

TABLE 2 権威の概念の発達段階

段階	概 要
0—A	権威は、権威者と自分を結び付ける属性、あるいは、愛情のきずなにより正当化される。また、権威者と自分を同一視することによって従ったりする。権威者の命令と自己の欲求とを区別することなく服従する。
0—B	権威は、権威者の物理的属性や外見の特徴により正当化される。これは、論理的に一貫したものではなく変わりやすい。命令と自己の欲求との葛藤を潜在的に認めている。命令は欲求を充足したり、欲求を妨げる行動を避けるために聞き入れられる。
1—A	権威は、命令を強制することができるような属性であり、従うかどうかは、権威者の社会的、物理的な力に対する尊敬の念により決定される。権威者の力は、全知、全能の雰囲気を持つ。
1—B	権威は、特別な才能や能力を反映する属性、及び、特別な人にしただけあげるような属性で正当化される。従うかどうかは、過去に助けてくれたといった相互性、互惠性に基づいている。
2—A	権威は、特に、命令することに関するこれまでの積み重ねや経験により与えられる。権威者は、よりよく指導する能力を持つものとして見なされる。従うかどうかはリーダーシップの能力が期待されるかどうか、あるいは、皆の至福や権利が考えられているかによる。
2—B	権威は、多様な状況要因を調整することにより正当化される。ある状況では、命令することができる属性をもっているが、他の状況では、命令できない場合があることを理解している。すべてのものの至福を願った協力として従うという同意に基づいている。

が、やがては、自分の中に基本的な概念や規則が内在化され、仲間との関係へと構造化し、発展していくと考えられるべきであると指摘した。Damon (1980) は、4歳から9歳児を対象にして、「公正」、「権威」に関する調査を縦断的に行い、いずれも発達段階が6段階あり (TABLE 1 と TABLE 2)、2年間のうちに段階が向上していることを認めているほか、概念間の密接な関係を推測している。しかし、直接、両種の段階間の関係を検討してはいなかった。

したがって、本研究では、これまで大きく道徳性として捉えられていたものの中でも特に、児童期の社会化において重要であると考えられる「公正」と「権威」両概念の発達段階間の関係を明らかにすることを目的とする。その際、公正については、すでに発達段階の順序性が妥当であることが認められているため、まず「権威」の発達段階の順序性を確かめ、その後「権威」と「公正」両概念との関係を検討する。

方 法

被験児：富山県下の小学校1年生46名、2年生54名、3年生92名、4年生94名、5年生96名、6年生103名、計485名。男女約同数。

実験材料：①Damon (1977) を参考にして「権威」に関する調査が作成された。例話が2つとA3大の補助図版が用いられた (FIG.1, FIG.2)。例話は、おとなの権威に関するものと仲間の権威に関するものの2種類であり、主人公はボール紙により図版上で動かせるようにした (FIG.3)。被験児の性に合わせて用いるため、男女用の2種類が作られた。段階の判定のためのマニュアル (Damon のものを翻訳したもの) と記入用紙。筆記用具。録音装置。高学年に対しては質問紙を作成した。②渡辺 (1986) の公正さの発達段階調査。

手続：まず、「権威」に関する調査が、小学校1、2

FIG. 1 例話(1)男子用の図版

FIG. 2 例話(2)男子用の図版

FIG. 3 登場人物

年生については面接法により実施され、中、高学年に対しては質問紙調査が実施された。手続、及び、評定は、Damon (1977) の手続およびマニュアルに基づいて一部修正して行われた。

(1)面接法：被験児は、個室に案内され、実験者に対座した。名前、年齢、兄弟数、出生順位が尋ねられたあと、2つの簡単な例話が与えられるのでよく聞き、あとの質問に積極的に答える主旨のことが教示された。実験者の役目は、例話を理解させることだけではなく子どもの権威の発達段階を迅速、的確に判断することであった。例話(1)、例話(2)の概要、及び、質問項目は次のとおりである。()内は女児用である。

例話(1)：おかあさんは、たかしくん(まりちゃん)に、自分の部屋を毎日そうじしてもらいたと思っています。おかあさんは、たかしくん(まりちゃん)に、「部屋をかたずけるまで外へ出て遊んではいけませんよ。」と言っています。でもある日、たかしくん(まりちゃん)のともだちのひろしくん(りかちゃん)が来て、「みんなが公園に集まっていて、これから遊ぶんだ。」と言いました。たかしくんは遊びに行きたいのですが、部屋がとてもきたないのです。あとでかたずけると言いましたが、おかあさんはゆるしてくれません。そして、遊びに行くのを止めるように言っています。

- ①たかしくん（まりちゃん）は、どうするべきですか。
- ②それは、なぜですか。
- ③おかあさんが、たかしくん（まりちゃん）にそのように言うことは正しいですか。
- ④なぜですか。
- ⑤どちらにしても、たかしくん（まりちゃん）が家をこっそりぬけだして、公園に行ったらどうですか。
- ⑥たかしくん（まりちゃん）がそのようにすることは正しいですか。
- ⑦おかあさんが、いねむりをしている間にたかしくん（まりちゃん）が逃げ出すことは正しいですか。
- ⑧また、おかあさんが起きる前にもどってきて、部屋をそうじすることは正しいですか。
- ⑨おかあさんは、たかしくん（まりちゃん）をつかまえたらいどうするべきですか。
- ⑩たかしくん（まりちゃん）にとって、それは、正しいことですか。
- ⑪おかあさんは、たかしくん（まりちゃん）を罰することができますか。
- ⑫どうしてできるのですか。
- ⑬たかしくん（まりちゃん）は、部屋をととてもきれいにしたのだけれど、おかあさんの機嫌が悪くて、「とにかく今日は、家にいなさい。」と言ったとすると、それは正しいですか。
- ⑭たかしくん（まりちゃん）は、どうするべきですか。
- ⑮たかしくん（まりちゃん）が、こっそり抜け出したら、それは正しいですか。
- ⑯子どもは、おかあさんがしなさいと言ったことは、何でもする必要がありませんか。
- ⑰おかあさんが、子どもとの約束をやぶるのは、悪いことですか。
- ⑱それは、どうしてですか、等であった。

例話(2)：(男子用)ここに同じチーム6人の男の子がいます。まもるくんは、このチームのキャプテンです。ゆうじくんはそのチームで野球をしています。まもるくん（キャプテン）は、ゆうじくんがあまり野球がうまいなと思っています。ゆうじくんは1塁手をやっています。でも、まもるくんは、ゆうじくに外野手をやるように言っています。(男子用)

- ①まもるくんは、ゆうじくんにどこを守ったらよいか命令できますか。
- ②それは、どうしてですか。
- ③ゆうじくんは、まもるくん（キャプテン）のことをきかなければならないですか。
- ④もし、ゆうじくんが自分とはとても野球が得意で、1

塁手をするべきだと思っていたらどうですか。

- ⑤ゆうじくんは、どうしたらよいですか。
- ⑥どのようにして、まもるくんはキャプテンになったと思いますか。
- ⑦チームでキャプテンを選ぶのには、どんな方法が正しいですか（大きい子か、年上の子か、好かれている子か、男の子か、女の子か）
- ⑧キャプテンが他の子に命令できるのはどんなことですか（ジュースを持ってくるように命令できるか。）
- ⑨チームのメンバーが、キャプテンに命令できますか。

段階判定の重要なポイントは質問のしかたにあるため、質問項目の選択、及び、表現のしかたは、被験児の個人差を考慮して臨機応変に対処された。その際、子どもの自発的な応答が引き出されることが念頭に置かれた。所要時間は、1人10分から15分であった。

(2)質問紙法：先の2つの例話を含み、必要な質問事項を選択して、質問紙が作成された。

(3)分析方法：Damon のマニュアルに各発達段階の内容と評定のポイント、及び典型例が詳細に記されており、それに従って分類された。以下にそれが示される。各段階の説明はTABLE1を参照。また、段階の判定は、2つの例話ごとに評定されたが、個人の総合段階として高いほうの段階が選択された。なお、評定は2人の間で行われ、評定者の一人は調査者(実験者)であった。不一致がある場合は協議の上決定された。

0—A段階の評定基準と典型的例

- ①命令されたことが、したいという欲求と重なる—そうしたいから。
- ②やりたくない命令に従う必要はない—好きでないから、したくない。
- ③権威は、愛情と自己同一性を基にしてあるもの（母と自分との同一視）—母が好きだから、従う。

0—B段階の評定基準と典型的例

- ①目的を達成するために、従わなければならない—遊びたいから言うことを聞く。
- ②もし、避けることができるなら、従わない—相手の反応を見定める。
- ③不快な結果(罰など)を避けるために従う—怒られるから、従う。
- ④権威者とは非権威者は、属性により区別されるが、その属性は権威の本質的な機能と異なり、一貫しない—親はおとなだから。キャプテンは年上だから。

1—A段階の評定基準と典型的例

- ①社会的、あるいは、物理的権力の属性を権威者が所有していることから権威者の権利に従うべきだとい

う主張—親は子どもに何でも命令することができるから。

②権威者の目を盗んで服従しないでおける方法がないという確信を持つ—命令から逃れられないから。

③服従しないと、悪い結果が(超自然的ともいえる)必ず起こると考える—従わなかったら、けがをするかもしれないから。

1—B段階

①権威者は、人を助ける能力を持ち、さらに、人を助ける地位にあるという理由から、権威者に従うべきという主張—自分を助けることのできる人であるから従う。

②われわれに対して過去や現在において良き行いをしてもらったという理由から、従うべきであると考え—世話をしてくれた人だから。チームのために働く人だから。

③権威者は、われわれが所有していないような素質や能力や知識を所有しているため、命令する権利があるという主張。ただし、ここでの素質や能力はリーダーシップという意味ではない—親はより物知りであるから従う。

④権威者が重要な点でわれわれよりすぐれているという信念を持ち、過去、現在、未来に於ける恩恵に答えようとする願望をもつ—いずれにせよ、親の言うことは聞くべきだから。

2—A段階

①権威者は、訓練や経験によりどのように命令を下すべきかを心得ている—経験を積んでいる人には従うべきである。

②われわれ一人一人が権威を発揮する権利を持っている—親は子どもの言うことも聞くべき。何の理由もない命令には従わなくてもよい。

③従わなかった場合の実利的必要性に基づく権利と、不正な命令には従わないという権利とを区別している—わざわざいいことにならないため、従う。

2—B段階

①権威者の命令がわれわれの至福を願ってのことだと信じて従う—親は子どもが正しく育つ方法を知っているから従うべきだ。

②権威者は、ある社会的状況に置いて、われわれを従えるに足る特別な才能をもっていることから、従う—キャプテンはチームにとって公正であり、有能なオーガナイザーであるから従う。

③権威は人から人へと移行するもので、ある特定の状況にふさわしい人が指導者になる—母親から父親へ

の権威の変化

- ④権威関係の目的や機能が、関連するものすべてを助けるべきだという主張—誰かがどの場面でも命令することはできないだろうが、その状況で権威を発揮する意味や目的が真にある場合には従うべきである。
- ⑤権威関係は、2つかそれ以上の集団の間の同意に基づいているという主張。したがって、同意がこわれる時、その関係はこわされる—ルールが公正であるという同意が得られているなら従うべきである。

権威の調査後、公正についての調査が渡辺(1986)の手續にしたがって実施された。

結 果

①評定の客観性

評定は、「公正」「権威」各々について独立して行い、評定基準の完全一致度がそれぞれ80%と74%であった。不一致についてはいずれも合議の上決定された。したがって、評定の客観性は高いと言えよう。なお、いずれも評定基準がマニュアルにしてあるため、評定者はよく理解、習熟した後に、「公正」「権威」の双方について別々に評定した。

FIG. 4 権威の発達段階 (総合)

FIG. 5 おとなの権威についての発達段階

FIG. 6 仲間の権威についての発達段階

②権威の発達段階について

FIG.4 から FIG.6 にそれぞれ、総合的な権威について、おとなの権威について、仲間の権威についての発達段階別の人数比が示された。いずれも学年との有意な正の連関が見られた ($w=7.90, p<.01$; $w=5.97, p<.01$; $w=7.07, p<.01$)。学年が上がるほど、0-A段階が減り、2-A段階が増える傾向が顕著であった。ただし、0-B段階は、6年生では少ないが、約20%のものがどの学年においても存在するとともに、1-A段階はすでに1年生から高い割合を占め、6年生まではほぼ同じ割合を占めていた。1-B段階については、全体に数が少なかった。

おとなの権威と仲間の権威を比較すると、おとなの権威は0-B、1-A段階に滞るものが多かった。1年生は、おとなの権威も仲間の権威も0-A段階が多く、2-A段階はまったく見られなかった。2年生は、仲間の権威に0-A段階が多いが、おとなの権威については1-A段階がほぼ半数を占める程度に増加していた。3年生は、双方とも2-A段階が現れる頃であり、おとなの権威については、1-A段階のものが多かった。4年生、5年生、6年生は、おとなの権威については、0-B、1-A段階が多いが、仲間の権威においては2-A段階が多くなった。ただし、0-A、0-B、1-A、が同程度の割合で依然存在していた。したがって、仲間の権威よりもおとなの権威の方が低学年から高い段階を示す子が多いが、0-Bや1-A段階に滞る可能性の強いことが示唆された。これに対し、仲間の権威は最も未熟な段階から抜け出す割合は低い、最も高い段階への移行はおとなに対するよりも早いことが示された。

代表的な権威の反応例を、次にあげた。

権威の0-A段階(1年生、男の子)

E(実験者): たかしくんは、どうしたらよいと思いますか。

S(被験児): かたずけてから行く。

E: それは、なぜですか。

S: わからない。

E: おかあさんが、たかしくんにそのように言うことは正しいですか。

S: おかあさんは正しくない。

E: それは、なぜですか。

S: わからない。

(規範的な考えがなく、自分の欲求と命令とした状態であるため)

0-B段階(2年生、女の子)

E: ひろこちゃんは、よしちゃんになわを持つ役目をするように、命令をすることができますか。

S: できない。

E: それは、どうしてですか。

S: わからない。

E: どのようにして、ひろこちゃんはキャプテンになったのだと思いますか。

S: (返答ない)

E: チームでキャプテンを選ぶときは、どんな人を選びますか。

S: やさしくて、背が高い人。

(外見的特徴で判断していると考えて、0-B段階と判定)

1-A段階(3年生、男の子)

E: ゆうじくんは、どうするべきだと思いますか。

S: 言うことを聞く。

E: それはどうしてですか。

S: キャプテンの命令だから。

E: まもるくんがゆうじくんに命令するのは正しいですか。

S: 正しい。

E: それはなぜですか。

S: キャプテンだから。

(社会的あるいは物理的権力の属性を権威者が所有していることから権威者の権利に従うべきだと考えているから)

1-B段階(6年生、女の子)

E: まりちゃんは、どうするべきだと思いますか。

S: きちんと部屋をかたずけてから、遊ぶとよい。

E: それはどうしてですか。

S: あとでやると、もし疲れた場合、かたずけるのが面倒になるから。

E: おかあさんが、まりちゃんにそのようにいうことは正しいですか、正しくないことですか。

S: 正しい。

E: それは、なぜですか。

TABLE 3 公正親の発達段階と権威の発達段階 (総合)

公正	権 威 の 発 達 段 階					計
	0-A	0-B	1-A	1-B	2-A	
0-A	14(2.89)	8(1.65)	11(2.27)	2(0.41)	0(0.00)	35(7.23)
0-B	9(1.86)	9(1.86)	21(4.34)	0(0.00)	3(0.62)	42(8.68)
1-A	18(3.72)	38(7.85)	114(23.55)	14(2.89)	58(11.98)	242(50.00)
1-B	5(1.03)	8(1.65)	22(4.55)	1(0.21)	9(1.86)	45(9.30)
2-A	3(0.62)	21(4.34)	41(8.47)	5(1.03)	50(10.33)	120(24.79)
計	49(10.12)	84(17.36)	209(43.18)	22(4.55)	120(24.79)	484(100.0)

数値は人数, () 内は% (被験児のうち1名を分析から除外した)

S: おかあさんは、早くやったほうがまりちゃんも
疲れないと思ったから。

(親は子どものことを考え、助ける立場の人であるから従う
のだと考えているため)

2-A段階 (6年生, 女の子)

E: まりちゃんはどうすべきだと思いますか。

S: 部屋の中をかたずけるべきだと思う。

E: それは、正しいですか。

S: 部屋の中が汚いと気持ちが悪いし、りかちゃん
と遊んでから、かたずけるのはいやになってし
まうだろうから。

E: おかあさんが、まりちゃんにそのように言うこ
とは正しいですか。

S: 正しい。

E: それはなぜですか。

S: 親であるから。子どもを甘やかすとあとまでく
せになってしまうから。

(権威者の命令が、至福のための関心に基づいていると考え
られているため)

③公正親の発達と権威の発達との関係

TABLE 3 に権威概念と公正さの発達段階が示されるが、公正さの発達と権威概念の発達との関係が、スコア法により検討された結果、有意であり、公正さの発達段階が上がるほど、権威の概念も発達することが明らかにされた。また、権威概念をおとなへの権威と仲間間の権威とに区別して検討したところ、いずれも有意であり、公正さの発達がそれぞれの権威の発達と正の連関のあることが示された ($w=6.79$, $p<.01$; $w=2.18$, $p<.05$; $w=5.92$, $p<.01$)。ただし、公正が1-A段階であるときに、権威が0-A段階のものと、2-A段階であるものの割合が高かった。TABLE 4 は、段階をこみにして、公正と権威の段階を比較したものであるが、その結果、総合、及び、おとなの権威、仲間の権威のすべてにおいて、公正の段階の方が権威の段階よりも高い段階にいるものの割合が高いことが明らかであった (総合段階; $\chi^2=12.62$, $df=2$,

TABLE 4 公正親と権威概念の発達段階の比較

権威	公正	同じ段階	権威>公正	公正>権威
総合段階		38.8	26.0	35.1
おとなへの権威		34.3	13.4	52.3
仲間への権威		28.9	20.5	50.6

数値は%

$p<.01$: おとなの権威と公正; $\chi^2=109.77$, $df=2$, $p<.01$: 仲間の権威と公正; $\chi^2=70.27$, $df=2$, $p<.01$ 。

考 察

①権威の発達段階について

権威の発達段階は、先行研究どおり学年とともに発達段階が向上していることが明らかになり、発達段階の順序性が明らかになった。また、おとなの権威と仲間の権威についても、学年と共に発達段階の向上することが明らかにされたが、2つの発達に相違する点が見られた。すなわち、1, 2年生においてはおとなの権威が仲間の権威に比較して高く、1-A段階の割合が高いことから、低学年においては親が絶対的な権力の持ち主として見なされていることが理解される。これに対して、4年生以降は、仲間の権威がおとなの権威よりも高い発達段階(2-A)を示す子どもの割合が増えており、権威がリーダーシップのとれる能力として考えられるようになる子どもが増えたことを示唆している。同様に、Damon の研究結果においても、おとなの権威に対する発達段階が低学年においては高く、しだいに仲間に対する権威の発達段階が向上する結果が報告されている。これは、低学年においては、まだ親や教師との関係が中心であり、しかも、仲間による組織的なゲームや縦の関係をもつクラブや活動に参加する機会が少ないからであろう。高学年になれば、ルールを伴うゲームに参加する機会が増え、チームの運営やキャプテンの選出について思考を促されるようになり、仲間間に於ける権威の概念が変化するためと考えられる。

その他、先行研究と比較すると、本研究の方が1-A段階にとどまっているものが多く、「親だから」「従うのがあたりまえだから」といった評定基準①に該当する反応が多かった。また、1-B段階にあたる反応が少ないことが特徴的であった。先行研究でいえば「何かできないことがあると、母は助けてくれるし、子どもにできないことをたくさんすることができる」「お母さんが子どものために世話をしているのにお母さんの言うことを聞かないのは不公平だ」「年齢にかかわらず、能力をもつものはキャプテンになれる」といった反応が見られたのに対し、本研究では見られなかったのが主な違いであった。

②公正観の発達と権威の発達との関係

本研究では、権威と公正の認知発達に正の連関関係のあることが明らかにされた。また、公正の発達が権威の発達よりもより高い場合が多いことも明らかにされた。Damon (1980) は権威と公正について、それぞれ別の6つの発達段階を提唱しているが、その内容を検討したときに、両方の発達段階の成立ちが非常に関連していることが理解される。すなわち、権威、及び、公正についての発達段階は、いずれも大きく3つのステージからなり、各ステージの特徴がかなり対応している。ステージ0(0-A, 0-B)の権威の段階は、おとなへの一方的な尊敬、服従心が特徴的であり、与えられた命令は、そのまま自分の欲求であるかのように聞き入れられる。公正の段階についても、おとなの言動がすべて公正であると考え、自分自身の欲求との区別がつかないのが特徴である。

ステージ1(1-A, 1-B)になると、権威においても、公正においても、絶対的な観念が強くなる傾向が現れる。権威においては、おとなが命令をするに値する絶対的知識や立場をもっていると考えるようになり、その命令に服従しないと、なにか超自然的なものから罰せられるという思いが強くなる。一方、公正においては、平等の主張が強く、均等に分けることが大切であるという柔軟性のない考え方をするようになる。ステージ2(2-A, 2-B)では、権威の段階においては、権威はその場その場において異なるものに与えられるものであり、状況や目的に応じた権威に従うようになる。公正においても、状況に直面した各個人がそれぞれ欲求をもち、尊重されることを最も適切な解決として望むようになる。このように、他律的な思考から自律的な思考へ、あるいは、自己の欲求との混沌とした状態から、柔軟性のない規則等に支配される状態を経て、状況に応じた問題解決を前提とした柔軟性のある状態へといった発達のながれ

が、双方の発達段階に見られるため、正の連関関係をもつのであらうと考えられる。

しかし、この2つの認知発達の進行度が異なることが明らかにされた。すなわち、「公正」が「権威」よりも高い段階にあるものの割合が高いことが見出された。Damon は、権威の概念が公正の発達の源であると考えたが、そうであれば、権威の発達段階の方が公正の発達段階よりも高い傾向にあるはずである。ところが、本研究では逆に、公正の概念が権威の概念を導いている傾向が示唆されたように思われる。これについては、以下のような考察ができよう。まず、権威に服従することは平等性の芽が生じるにあたって、大きな妨げになると考えられる。おとなの権威に服従することが永久に公正なことだと考えられているなら、平等という相互性の考え方は発達しないだろう。しかも、権威者は年少児にとっては、懲罰といった応報的なものを背にして絶大的に君臨した存在であり、平等という考えを掲げることは相当な勇気のいることである。

ところが、年齢とともにおとなイコール「権威者」という考えから離れ、おとなが権威者たる理由をあれこれと考え始めるようになる。すなわち、おとなが子どもに命令を与えて良い理由が、年齢、性、体の大きさ、といった外見的特徴から、知識、能力、才能といった資質に変わり、最終的には、全体の至福のためにある状況にとって適切な能力を有することだと考えるようになるわけである。この発達の経過のなかで、権威者は単におとなだけではなく、仲間にも現れるようになる。仲間との協同活動を通じて、「権威をだれにゆだねるか」「権威をもつものは何をすべきか」といった問いを投げかけるようになり、おとなの権威よりも、仲間の権威を重要なものとして認識するようになって考えられる。分配の公正さの発達にとって、この仲間への権威の認知発達は非常に重要であらう。おとなからの一方的な命令が必ずしも公正なものでないことに気付くことは、公正を発達させる上でも重大な転機であるが、これは、仲間との相互作用によりもたらされると考えられるからである。最終的には他人の考えにそのまま服従することをやめ、自分の考えで公正な解決を行うようになり、権威にしばられない自由な立場が得られるようになって推測される。

このように、われわれは生まれながらにして権威者に一方的に服従する性質を備えているというよりは、「何が対人関係を維持するうえで公正であるか」という問いを自然に発していく資質を備えた存在であるといえるのではないであらうか。その結果、幼少期には、そのような考えは意識面には現れないが、自分の欲求や自己の存

在を意識し、客観視できるようになるにつれて、従うべき対象、すなわち、権威に対する概念も変化していくと考えられるのである。ただし、すべてのものにこの発達傾向が該当するわけではなく、過程においては一方が滞り、他方が先に発達したりという場合もある。これは、おそらく、個人の経験やその他の認知発達等の違いにより異なって来るからであろう。この点については、権威と公正の両方の概念について葛藤の生じるような場面を設定して、検討することが望まれ、今後の課題としたい。

最後に、権威の発達についても触れたが、Damonの研究に比較して、1—A段階以降は、貢献度や能力のあるものに多く分配することが公正であるという1—Bの考えをもつものが非常に少なかったのと同様に、権威の段階においても能力や以前に受けた恩があるから従うという理由づけをする1—B段階が少なかったことが結果として明らかであった。これに比較して、公正においては絶対的な平等性(1—A)に滞るものが多く、権威については絶対的な権力のあるものに従う(1—A)という考えのものが多かった。いずれの段階においても1—A段階であるというのは、一見矛盾しているようであるが、1年生から6年生において、特に3年生ぐらいにおいては何か絶対的な規則や自然律のようなものを感じる傾向が強く、権力のあるものを特別視して奉る一方、権威者以外のもの間では絶対的な平等性を確保したが、それを無視すれば災いが生じるといった傾向が強いように思われる。なかには、状況に応じて公正な状況も権威の与えられる者も変わりうるという柔軟な考えに近い答えも見られたが、小学校段階では、まだ2—Bと評定できるものはいなかった。

また、日本においては、権威者のもつ資質や包容力といった権威の背景にあるものを意識して服従する(1—B段階「もの知りだから」)よりは、名目的な立場(1—A段階「キャプテンだから」)をもつ、その人それ自身に盲目的に服従するといった傾向が強いように思われる。中根(1967)は、日本人のリーダーの資格が必ずしも目的を遂行する個人の能力にあるのではなく、「タテ」の人間関係を前提としていることを述べているほか、個々人の能力によるよりも社会的、物理的な権力が尊重され、服従する対象となることが明らかにされており(種, 1984),

日本の社会独特の文化的要因が影響していると考えられる。この点は、公正、権威に関わる日本の社会的、文化的要因についてさらに検討し、心理学的な方法論で検討していく必要があるであろう。

引用文献

- Damon, W. 1977 "Legitimacy and obedience The development of authority" The social world of the child. San Francisco, Jossey-Bass.
- Damon, W. 1980 Patterns of change in children's social reasoning: a two year longitudinal study. *Child Development*, 51, 1010—1017.
- Kohlberg, L. 1969 Stage and sequence: the cognitive developmental approach to socialization. Goshin, D.A. (Ed.) Handbook of socialization, 347—480.
- 中根千枝 1967 タテ社会の人間関係 講談社
- Piaget, J. 1932 Le jugement moral chez l'enfant. Paris: Felix Alcan. (大伴茂訳 児童道徳判断の発達 同文書院)
- Rawls, J. 1971 A theory of justice. Cambridge: Harvard University Press.
- 種 路生 1984 第6章 日本の共同体の構造 日本の風土と社会 産業経済研究協会
- 渡辺弥生 1986 分配における公正観の発達 教育心理学研究, 34(1), 84—90.
- Youniss, J. 1976 "Affirmation", Unpublished manuscript, Catholic University of America.

謝 辞

本調査の実施にあたり、調査時点で筑波大学4年生であった、袖野安代さんに大きな協力を得ましたことをここに深く感謝いたします。また、本論文をまとめるにあたり、筑波大学心理学系教授高野清純先生、同教授杉原一昭先生に有益な助言をいただきましたこと、及び、調査にご協力いただきました小学生の皆様並びに先生方に心より感謝の意を表します。

(1988年8月15日受稿)